



切絵 比企義彦 作

うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所
茨木市元町4-3
072 (622) 2346

[http://www.
ibarakijinja.or.jp/](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

末社五社覆屋御造替工事始まる

天石門別神社御鎮座千二百年記念の関連事業として本殿前東側の主原神社・多賀神社・皇太神社各社が、旧主原村・下中条村そして上中条村から明治四十一年に当神社境内に合祀されて丁度今年が百年目に当たるのを記念し、併せて天満宮及び事平神社をも含めた御造替が、いよいよ始まりました。

本年一月二十五日、天満宮・主原神社・多賀神社・皇太神社の御神体を仮殿に遷す仮遷座祭が総代を始め旧三村の氏子多数の参列のもと斎行されました。

午後七時、宮司以下祭員・伶人そして参列者は祓いを受けた後、天満宮へ参進。宮司が合祀百年にあたり覆屋御造替のため仮殿に御遷りいただく旨の祝詞を奏上。続いて社殿前に輿が据えられ、周りを絹垣で覆われると同時に境内の全ての明かりが消され出御を待ちます。「オー」という三声の中、宮司によって御神体が輿に遷され、荘厳な楽の調べの中、御本殿東側にしつらえた仮殿へと進まれ御鎮座になりました。次いで主原神社・多賀神社・皇太神社と一座一座ごと仮殿にお遷りいただき無事四社の大神様を仮殿に御遷座いただきました。

一月末からは、共に江戸時代の作と言われる天満宮・主原神社の御神殿を境内奥の皇大神宮北側に一時保管し、覆屋の解体、皇太神社の移設工事が行なわれ、続いて、二月二十日には工事の無事竣工と覆屋の長久堅固なることを祈念して地鎮祭が斎行されました。

現在は、基礎工事も完了し、五月二十二日、一時保管しておりました天満宮・主原神社の御神殿を基礎工事の終わった礎石の上に安置され、本格的作業に移ろうとしています。

幻の名水

左図は、江戸時代中期、寛政十年（一七九八年）に刊行された撰津名所図会中の茨木神社について書かれた箇所挿絵です。そこには、川幅いっぱい流れれる当時の茨木川の様子が描かれています。茨木川は、時として暴れ大きな被害をもたらすこともありましたが、現在、片桐町の梅林寺は、もともと茨木高校の北側、かつて寺町と呼ばれた所にありましたが、一五七〇年代の水害によって茨木



神社北側へ移築され、さらに一六五〇年の洪水によって現在の地へと二度に亘り水害によって移されました。二度目の水害は特に「梅林寺切れ」と呼ばれます。

その一方で茨木川の豊富な水量は、豊かな地下水を生み、この地の里人の生活を豊かにしました。当神社西北の隅にも今も残る「黒井」。そこに建てられた石碑には、表面に「東宮殿下御用水」裏面に「明治四十四年十一月建立 豊公管用茶水」と彫られています。表面は、明治四十四年十一月に三島地区で陸軍大演習が催された折、東宮殿下（皇太子殿下、後の大正天皇）が梅林寺で御仮泊になられた時、黒井が最良であるとして御用水として差し出されたことを記しています。裏面は、豊臣秀吉公が、鷹狩りのため茨木城に來られた折、黒井の水を差し出されたところ大いに悦ばれ、茶の湯に供するため、黒井からくみ取った水を、わざわざ大阪城まで運ばせたことを意味するものです。

前記の撰津名所図会にも「黒井の清水」は茨木の社の後にあり。名水にして寒暑増減なし。茨木郷中多くの用水とす」と記されています。また、大正時代に刊行された大阪府全誌にも「黒井・赤井・青井は島下郡の三清水と称せられ

正冷淡味・霖雨旱魃共に増減なく、井底常に透徹せり」と紹介されております。

この清らかで豊かな地下水によって江戸時代中頃の最盛期には酒造家十二軒、醤油造家三軒を数えるなど産業を興し、また江戸時代後期頃からは、黒井を初め泉屋井戸・萩屋井戸といった屋号の付いた五つの元井戸と言われる井戸から孟宗竹で各家々に飲料水として配水がされ、人々の生活を支えてきました。

この竹管水道は昭和の初め、現在の公共上水道ができるまで続きました。城下町以外で庶民の力によって竹管による井戸水の上下水道は、大変珍しいと言われます。一昨年、黒井の復活を試みましたが、百メートル以上の掘削が必要とわかり断念しました。

太古の昔より田畑を潤い、飲料水として、人々の命の源であった茨木川も廃川となり緑地帯に変貌しました。

かつて栄えた酒造業も今日では中尾酒造のみとなり清らかで豊かな水に恵まれたかつての面影を感じるものはほとんどなくなっています。今では、田畑へ取水した場所を示す「樋」の石碑と黒井のみとなっていました。

神さまのおはなし ⑬

国譲り 其の二

前号のあらすじ

あまてらすおみかみ
天照大御神さまは、葦原中国の荒ぶる神々を説得し帰順させるために建御雷神さまを使わせ大國主神さまとその子の事代主神さまは帰順しました。別の子建御名方神さまは力くらべを挑んで建御雷神さまの御手を取ろうとしました。

そこで御手を取らせたと、建御雷神さまはたちまち手を水柱に変え、また剣の刃に変えられました。それで建御名方神さまは恐れて退きました。そして今度は、建御雷神さまが建御名方神さま手を取ったところ、若い葦を取るようにやすやすとつかみつぶして投げ放てば、建御名方神さまはただちに逃げ去りました。そこで建御雷神さまは追って行き信濃国の諏訪湖までたどり着いて殺そうとした時に、建御名方神さまは「恐れ多いことです。私を殺さないで下さい。この所以外、他の所には行きません。また、我が父大國主神の命には背きません。八重事代主

シリーズ神道 ②8

「祖霊のまつり」

その二

日本人と葬儀

前回に、祖先との交流ととの視点から、私達が祖先より途絶えることなく生命の灯火が受け継がれ今日に至ったことに感謝の気持ちを含めて、お祀りをする古来より行われてきました行事について書かせて頂きました。

「生は死とともにあり、死なくして真の生はありえない」と言いますが、身近な人との悲しい別離は、辛く哀しく痛惜の極みであります。また、私達にとって自らの生命の尊さを知り、今に生きていることの意義を見つめ直す、大切な機会でもあります。

私達日本人の伝統的な信仰は、人の犯した過ちは自らの慎みと神々の御力により祓い除かれるという、神々への厚い信頼のもとに培われてきました。古来、神事及び行事の中で様々な清めの儀式が行われるのも、神々を恐れ畏み、神々のご守護をうけ

て、現世であるこの世界で自らの力が少しでも社会の発展や繁栄に貢献できる様にとの「祈り」があるからです。

しかしながら、この世に生をうけた人は、死を免れることはなく、これも又、自然の理であります。

家族や親しい人が死を迎え厳かに見送る葬送の儀礼である「葬儀」は現代では、中世以降、仏教の興隆とともにその多くが仏式で営まれております。元來、我が国には仏式ではない固有の信仰に基づく葬儀がありました。

現存する最古の書である「古事記」には

『喪屋を作りて、河雁を岐佐理持とし、鷲を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を確女とし、雉を哭女とし、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びき…』

と有り、天若日子の葬送についての記述又は、様々の古墳の出土品からも古代の葬儀のあり方を伺い知ることが出来ます。

古代の「葬儀」は故人からの「御魂」の受け継ぎを最も重視し、その儀式として一族の後継者は、現在の「お通夜」に相当

する日に、故人を安置している一室において生活し、その夜に「寝間」を共にして故人と「添い寝」することにより、祖先から連綿と受け継がれてきた「御魂」を我が身に受け継承するのです。

この精神は、日本人特有の信仰であり、現代では葬儀を通して、故人を偲び、その生涯を讃え敬うことによって、私達は改めて故人の存在の大きさを知り、有り難さに気づきます。

今を生きている私達は、多くの人々に支えられて生きていることを静かに顧みながら、生命のつながりを実感し「生」への思いをより強くすることが祖先に対する報いでありましょう。



神の言には背きません。この葦原中国は、天つ神の御子の命に従います」と申されました。

そこで、建御雷神さまは再び大国主神さまの所に帰ってきて「あなたの子、事代主神・建御名方神二柱の神は、天つ神の仰せに従い背くことはない」と申した。あなたの心はどうか」と尋ねられました。大国主神さまは答えて「私の子等二柱の神が申すことに従い、私は背きません。この葦原中国は仰せのままに献上しましょう。ただ、私の住みかだけは、天つ神の御子のお住まいのように、盤石の上に宮柱を太く立て、千木を高くそびえさせてお祭り下されば、私はこの出雲に隠れておりました。また、我が子たち大勢の神は、八重事代主神が、先頭に立ち、後に立つてお仕えますので、背く神はいないでしょう」とこう申されました。そして出雲国の多芸志の小浜に天つ神の御殿を造り、水戸神さまの孫、櫛八玉神さまを調理人として天つ神にご馳走を出した時に、大国主神さまは祝福の言葉を唱えられました。

そうして、建御雷神さまは高天原へ返り上り、葦原中国を帰順し平定したことを復命されました。

伊勢の神宮 式年遷宮だより

鎮地祭が

斎行されました

伊勢の神宮では、第六十二回神宮式年遷宮の諸祭行事の一つ鎮地祭が、四月二十五日に内宮・外宮両宮の新御敷地で斎行されました。

鎮地祭は、一般では住宅などを建てる際におこなう地鎮祭にあたります。新御敷地でおこなわれる最初のお祭りで、いよいよ本格的な御造営がはじまります。



募財ご奉賛のお願い

式年遷宮は古来、国家の重義として国費をもって行われてきま

会員種別	寄付額	参宮章	特別参拝		案内状	感謝状 記念品	その他
			位置	期限			
特別名誉会員	1,000万円以上	参宮章	内玉垣 南御門外	平成 45年迄	遷宮祭 奉祝祭	感謝状 卓布(大) 広報誌	復古館 農業館 神宮美術館 への入館 (参宮章提示)
名誉会員	500万円以上	"		平成 40年迄			
特別会員	200万円以上	"		平成 35年迄			
1級有功会員	100万円以上	"					
2級有功会員	50万円以上	"	中重 御鳥居際	平成 30年迄	奉祝祭	感謝状 卓布(小) 広報誌	
3級有功会員	10万円以上	"					
1級賛助会員	5万円以上	"	外玉垣 南御門内	平成 28年迄	参宮章を以 て案内状に 代える	扇子 広報誌	
2級賛助会員	1万円以上	"					
3級賛助会員	5千円以上	"		1回	-	絵葉書	
協賛員	1千円以上	参宮章付 絵葉書			-	-	-

した。しかし、時代の趨勢に従い昭和二十八年の第五十九回のご遷宮からは、民間団体である奉賛会の募財協力により執り行われて来ました。

今回の第六十二回も財団法人伊勢神宮式年遷宮奉賛会が設立され、広く国民の皆さまにご奉賛いた

っております。茨木市でも、茨木市商工会議所

及び市内の神社界が中心となり支部が設立されています。

神宮への募財は、指定寄付金に指定されています。また、神宮の奉賛者に対する待遇は別表の通りです。

募財は当社でも受け付けております。詳しくは社務所までお問い合わせください。

これからの主な神事

大祓・茅の輪くぐり神事

六月三十日 午後二時斎行
茅の輪くぐり 厄除神楽
茅の輪守り・粽授与

夏祭

七月十三日 宵宮祭
十四日 本宮午前十時斎行
神輿渡御・神楽奉納

事平神社例祭

九月十日

例大祭(秋祭)

十月十日 午前十時斎行
七五三詣 十一月中随時
祈禱者にお守り・おみやげ授与

恵美須神社例祭

十一月二十日

石門別神社記念祭

十一月二十二日

新嘗祭

十一月二十三日

大祓・除夜祭

十二月三十一日

